

彙報

史學研究會

例會 五月八日(土)午後一時半より史學科第一教室に於て左の講演を行つた。

伊太利に於ける最近の考古學的研究 文學士 角田 文衛氏
海の地政學 本會評議員 教授 小牧 實繁氏

角田氏の講演は、伊太利の古代文化を、各段階即ち舊石器時代、新石器時代、銅器時代、青銅器時代、鐵器時代の順に概説し、其處で年久しく論議されてゐる若干の問題を抽出した後、夫等に關する從來の見解と最近の學說とに就いて詳細に解説したものである。特に、銅器、青銅器、鐵器諸文化がアーリヤ人によつてアルプスを越えて北伊太利へ齎されたといふ舊來の學說に對する、アドリヤ海を渡つてボスニヤ方面より同じアーリヤ人に依つて移植されたと想定するパトロニ教授等の新見解の如き、またはエトルスキ人の小亞細亞起源說に對するギツラノーザ人からの土着的出自を主張するアントニエーリ教授等の新學說の如きは、我々が伊太利の古代文化の體系を考據する上で、頗る注目すべきであることを強調した。

小牧教授の講演要旨

古典に謂はゆる「葦原中國」とは日出づるところのアジアの中心國日本の意であり、「よもつくに」とは夜の國、黃泉であると共にまた日没する處のヨーロッパであり、更に世界の中心日本に對する四方周邊の國を指すものであると解することができる。また屢々「常世のくに」とみえるのは恐らく南方の而も熱帶の地方を指すものと考へられる。

これら「常世のくに」「よもつくに」と「葦原の中つ國」とを媒介するものは、その間に存する「海原」或は「滄海原」であり、同時にそれはまた皇孫の治しめす對象としての「あをうなばら」の國でもあつた。雄渾なる古典の精神はそれを廣く世界の海として理解せしめる。神代日本の海洋民族はまたそこに盛んに活躍したのであつたらう。

「葦原の中つ國」、「よもつ國」の中つ國として、「常世の國」南方熱帶地方を歐米の魔手から解放し、やがては世界の「よもつ國」をして皇國日本の 天皇の御政にまつるはしむべく世界の海「うなばら」或は「あをうなばら」を制禦し統治することが皇國日本に課せられた光榮ある使命に外ならない。

讀史會

例會 五月二十八日(金)午後六時半より樂友會館第一號室に於て開催。西田教授、藤助教授、東伏見講師以下約三十名出席し、左の研究發表、及び學生幹事による静岡、山梨方面研究旅行報告があつて九時半散會した。

- 一、山鹿素行の經濟思想
- 三回生 石川 通君
- 二、精神史の根本問題
- 篠崎 勝君

讀史會身延、伊豆、靜岡研究旅行報告

大東亞戰爭第三年を迎へて、戦ひは愈々深刻の度を増し、剩へ
 昨春全國民を極度に憤激せしめた敵機の本土空襲一周年を前に控
 へた四月上旬が學生鍛錬の期間と定められた。我々國史専攻生は
 學問の研究心の助長と、他方國體訓練の目的をもつて研究の旅に
 出る事に決した。而して信濃路、甲州、豆州、へんの準備萬端整つて
 出發を待つばかりの時、警戒警報發令され國土防衛の重大なる任
 務の一端を荷ふ吾々は出發を延期せざるを得なかつた。その後幾
 ばくもなく警報は解除され、平靜狀態の續くを見て舉行したので
 あるが、此の度は時日の關係上、甲州南部、豆州、駿州に限つた。
 四月二十九日(木)午後六時三十分、藤先生以下、大學院學生、
 研究室關係者、學生等二十一名集合、同七時五十一分發の東京行
 列車に乘車出發した。

四月三十日(金)午前六時四十分富士驛着、同六時四十五分、同
 驛發身延電鐵に乗りかへる。車窓に仰ぐ靈峯富士は一點の曇りも
 なく、身に沁む朝の爽氣は、前夜の睡眠不足を一度に拭ひ去つて
 呉れる。富士宮驛で東伏見先生が一行に御加はりになる。同八時
 十九分身延驛着、西田先生、南部日實氏等の御出迎へをうけ、バ
 スにて久遠寺へ向ふ。

この地は文永十一年五月十七日、日蓮上人が「天竺の靈山此の

處に來れり、唐土の天台山テンゲク親アツクり此處に見る(松野殿御返事)と
 して日蓮一宗の信仰の地と定められたところである。老杉聳え
 たつ參道を上ることしばし、一行二十三名は本坊に休息する暇も
 なく、直ちに御案内を受けて諸堂を拜見する。大客殿、古法眼の
 間と云はれ法眼元信が心血を洩いだ椽繪のある大書院、水鳴樓、
 佛殿納牌堂、本師堂、一宗の信仰の中心、宗祖日蓮の御靈骨を藏
 する御眞骨堂、祖師堂等である。而して是等は徳川末期から明治
 初期にかけて度々火災の難に會ひ、何れも明治中期以後の建築で
 ある。少憩の後、南部文書並當山關係文書等を拜見する。その主
 なるもの數點を左に記す。

▽南部家文書

- 一、後醍醐天皇綸旨 (建武元・五・三) 一通
 - 一、後村上天皇綸旨 (正平十六・六十一・九) 一通
 - 一、同 (正平二十二・八・廿五) 二通
 - 一、陸奥國々宣(北畠顯家袖判) (建武元・十二・七以下) 六通
 - 一、北畠顯信書狀 (正月十八日) 一通
 - 一、陸奥國目安書注進狀(顯家袖判) (六月十二日) 一通
 - 一、陸奥口口宣(顯信袖判)(延元二・八・六) 一通
 - 一、北畠顯信申狀 (正平十一・十一・十九) 一通
 - 一、南部政長讓狀 (正平五・八・十五) 一通
- 是等貴重なる文書に依つて、南部一族の勳皇活動の一半を知り

得たのである。即ち日蓮聖人を此の身延に迎へた南部實長の子、實繼が尊良親王に仕へ奉り、その孫師行は北畠顯家に、同じく政長は北畠顯信に、又政長の子信政は楠木正行に屬し、同じく政持は信政の子信光と共に後村上天皇に御從ひ申上げて盡忠の誠を致した事蹟が眼前に展開せしめられ、吾人の胸中深く刺すものがあった。久遠寺關係文書その他貴重もの寺寶なども多數あつた様であるが前記の如く、數度の火災にて殆ど熾失の厄に遭つたとのことで、我々が拜見した主なるものは

- 一、後陽成天皇宸筆御和歌(短冊) 一軸
- 一、後水尾天皇宸翰 一幅
- 一、梶井宮常仁親王御筆「本化正宗」 一通
- 一、有栖川熾仁親王御筆經卷 二卷
- 一、昭憲皇太后御筆 一軸
- 一、徳川光圀畫并讀 八軸

南部家より晝食の御饗應を忝うし、深き謝意を表しつゝ辭し、十三時四十分、身延驛發、富士へ向ふ。前夜來の疲労漸くあらはれ睡魔しきりに襲ふ。十五時富士着。同十二分發三島へ、更に駿豆鐵道に乗りかへて韭山へ、韭山驛下車後、韭山城を右に見てめぐりゆけば老松蒼然たる間、彼の有名な反射燈の創造者、江川太郎左衛門英龍の屋敷が、古き歴史を物語ることよく立つてゐる。代官屋敷の結構に昔を偲びつゝ、大砲鑄造に用いられた諸器械數種、嘗ては時代の尖端を進みし遺物を見學しては先人の偉功を仰

ぐとともに我々の直面してゐる現實に思ひ至るのであつた。靜寂なる豆州中部の晩春の香に酔ひつゝ丘の邊を進むこと一小時間にして反射燈所在地である韭山村鳴瀬に着く。薄緑の木々を背景に立つ四柱の煉瓦の一割こそ、江川太郎左衛門が暮末外艦の憂を除かん爲に、幕府に建議し築造した反射燈である。一度は豆州下田に築造したが附近の外人の徘徊を忌みて、この地に、安政元年四月二十一日から翌二年にわたつて造り、元治元年迄約十年間に大小數百門の大砲、砲彈、附屬品等を鑄造したのである。當時我國の門戸を亂打し、威壓を加へた米國等に對し、いさかも屈せず國土を守らんとした八十七年昔の時代の息吹きを強く此の反射燈より受けるのであつた。前の茶店で新鮮なミルクに依つて疲れをいやし、夕園濃き中を伊豆長岡驛へ、驛前からバスにて長岡、山田屋旅館着。東京より先服部君が先着してゐられた。

五月一日(土)午前六時、前日迄の疲労をすつかり忘れて起床、八時十二分一行は伊豆長岡を後にして三島へ向ふ、八時五十分三島神社につく。官幣大社三島神社は玉織入彦殿之事代主神を御祭神として往古から朝廷の御崇敬が厚く、又源頼朝舉兵の秋、此社に戦捷を祈願して以來、武家の信仰あつく、又街道の名祠として一般人の信仰するところであつた。社殿は權現造で明治二年に出来上つたものである。寶物館にて、平政子奉納と云はるゝ鎌倉時代美術工藝の逸品なる揃笥を初め、銘秋義の脇差、銘宗忠の太刀、三島神社特殊神事田祭の圖等數十點拜觀し、續いて當社所藏の古文書を拜見する、その主なるものは左の如きものである。

一、源頼朝下文 (治承四・八・十九)以下 三通

一、北條時政御教書 (元久二・二・二十九) 一通

一、鎌倉將軍家裁許狀 (安貞二・三・三十) 一通

一、伊豆國司隠宣案 (建長元・十) 一通

一、鎌倉將軍家安堵下文(正和四・九・十) 一通

一、雜訴決斷所牒 (建武二・三・十二) 一通

一、北畠顯家寄進狀 (延元三・正・七) 一通

等四十五通であつた。

限られた時間のため早々に辭し、清冽なる小川のせまらぎの畔を富士の裾野をかすか雲霞の中に望見しつゝ三島驛へ。十一時五十分静岡へ向ふ。車中にて晝食。十三時五十一分、先輩田中氏海老澤氏(地理)等の出迎をうけて静岡着。直ちに縣立静岡圖書館を訪れて葵文庫を見學する。先日から天候に恵まれて居た我々も、遂に妙な雲行に氣を拂はねばならず、やがては細雨を甘受せねばならなかつた。

葵文庫とはもとの江戸の開成所、昌平齋、及横濱語學校三校の藏書が駿府學問所にうけつがれ、その廢校後静岡師範學校を経て、こゝに收藏されるに至つたもので、従つて審書調所、洋書調所、開成所、昌平坂學問所、外國方、陸軍方等の藏書印が捺される。その主なるものを列記すれば

一、道書全集 編者不明 (明)(萬曆十九年)

一、論 語 (慶長四年)

一、駿河版群書治要

一、易注疏大全 張溥 (明)(崇禎七年)

一、ハルマ和解寫本

一、シヨメル百科全書(關譯本)

一、一字生新編(右譯書)

その特別陳列を拜見の後、書架への御案内を戴いた。そは降る雨の中を、静岡城趾を左にながめつゝ約二軒にして山

麓の一禪刹、臨濟寺に達す。

臨濟寺は臨濟宗妙心寺派に屬する寺で太原崇孚の師大休を開山と仰ぎ、後奈良天皇の勅願所として、今川氏の保護をうけてゐた。永祿十一年、天正十年の二回災火に會つたが正親町天皇の勅に依り徳川家康が現今の堂宇を建立した。かく朝暮の尊崇をうけ維新迄は「東海最初第一の禪林」としてその寺勢を誇つたのである。山

門のすぐ左に今川義元墓所を拜して奥へ進む、時に恰も凱旋せる護國の英靈に對する御讀經の聲が音もなき雨の條間を縫つて流れて来る。靜かな默禱の一刻である。徳川家康が人質として今川家に預けられて居た頃の學問所自室があり、此の室及びその隣室に數多くの寺寶、及古文書の一部が陳列されてゐた。

▼古文書關係

一、後奈良天皇女房奉書

一、今川義元寺領寄進判物 (天文七・五・二十二) 一通

一、今川義元書狀 (岡一|天文八一六・朔) 一通

一、太原崇孚覺書寫 (庚戌一|天文十九一十二・二) 一通

一、武田信玄判物 (永祿十二・四・十五) 一通

その他武田勝頼、徳川家康等の寄進狀及當寺寺領關係文書數通あり。十四時四十分、辭して細雨の中、もとへ引返す事約一軒、東側に静岡淺間神社を見る。當社は神部神社、淺間神社、大歳御祖神社があり、夫々大己貴命、木花開耶姫命、大歳御祖命を祀る。新緑したるばかりなる樹間に竝立する社殿の宏壯さは駿河日光と呼ばるゝも當然とうなづかれるのであつた。

社務所にて當社關係文書を拜見する。

一、今川範氏判物 (正平七・正・八) 一通

一、今川義元判物 (天文十一・九・十三) 一通

一、武田信玄判物 (永祿十三・正・二十) 一通

その他、今川、武田兩家の朱印狀、徳川家朱印狀安堵狀などがあつた。又有名なる繪馬の一枚、山田長政戦艦の圖にも接する事が出来た。三十分餘りにして辭し静岡市内を横切つて驛に至る。此處で東上さるゝ東伏見先生と御別れして、又御多忙の中、わざわざ案内の御勞をとつて戴いた田中氏等に感謝しつゝ、十六時四十分發下り急行列車上の人となる。斯くて研究見學を終へ、この旅の目的もほど達する事が出来たと思ふと、心認かに安堵の胸をなで下すのであつた。

最後に當旅行に於て種々御好意を賜はつた各社寺院文庫及びその他の諸方に對し厚く御禮申上げます。(學生幹事・中島記)

東洋史談話會

例會 五月十一日(火)午後六時半より樂友會館にて開催。日

本・佛印兩政府間の文化交流教授として渡印の本學梅原教授に從ひ、前後四月間の佛印旅行を終へて歸國せる藤原利一郎氏より旅行談を聞き、三回生白木龍雄君より研究發表あり。那波教授・田村助教以下二十名の參會あり。

支那學會

大會 五月十五日(土)午後一時より文學部第八教室にて開會。講演者並びに講演題目左の如し。

楚の樁杭に就いて 藤枝 了英氏

世說新語の機智的性情 村上 嘉實氏

經學即理學 羅繼祖氏

廣東入市問題の一考察 吉川幸次郎氏通譯

支那古代の尙古思想に就いて 内田 吟風氏

最近に於ける「國文」教學法の改進に就いて 重澤 俊郎氏

倉石武四郎氏

西洋史讀書會

例會 二月二十六日(金)午後六時より樂友會館にて開催。出席者、原教授以下十七名。

1. Sully, Grand Design 1713

二回生 泉 倭雄君

1. Huizinga, Erasmus 植村 雅彦氏

例會 四月二十七日(火)午後六時より樂友會館にて開催。出席

者、原教授以下十四名。

一、W. Goetz, 世界史観 二回生 秋山 博愛君

一、Winckelmann, 古代美術史 二回生 加藤 一朗君

地理學談話會

例會 五月一日(土)午後二時半より地理學實習室に於て左記研究發表を行つた。出席者小牧教授を始め十六名。

一、南方原住民の心性 三回生 齋藤 晃吉氏

一、白濠主義 河地 貫一氏

地理二回生安城・濱名湖見學記

小牧教授、野間講師を始め一行十四名は五月十八日早朝、京都驛發。熱田神宮參拜後、安城に向ふ。漸々と水を湛へる苗代、或は麥秋近き畑を車窓に映じつゝ安城着。同町大東館に投宿。

十九日バスを驅り早朝より板倉農場へ赴く。明治十三年用水開鑿後七年目より幾多の困難と闘ひ現在に於ては、その經營方法、其他の諸點に於て農家に寄與する處ある篤農家なり。縣立種籾場、同農事試驗場、明治用水水利組合を歴訪、戦時下農村問題、農業經營に關し、得る所多し。午後安城を辭して、濱名湖今切西端に位する新居園跡を見學。辨天島松月館に夜を迎ふ。

二十日、辨天島水産試驗場訪問、同場長より、湖沼水産に就き、誠に興味深き話を承り、場内見學後將津より舟行、一時間餘にして濱名湖北岸佐久米着。一路バスにて姫街道を走り、氣賀着。同

町園跡を見學後、再びバスにて宗良親王を奉祀する井伊谷宮に參拜。氣賀にて晝食後、バスにて濱松へ南下し解散。時に午後二時半。(高村記)

考古學談話會

例會 昭和十八年三月七日(日曜日)午後一時三十分より樂友會館第五號室に於いて開催。梅原教授・東伏見講師を初め、藤・田村兩助教授、水野・村田・室賀各講師以下、教室員、學生等凡て二十八名出席。左の如き三氏の講演あり頗る盛會であつた。終つて五時より同會館小食堂に於いて最近軍務を終へ目出度く歸還せられた今井富士雄、松田一政兩氏の歡迎の意味を兼ねた親睦晚餐會を行ひ懇談を重ねた。

一、グスターフ・コッシナ教授と現代獨逸考古學界

(本號掲載)

角田 文衛氏

一、雲岡に於ける二三の因緣圖像に就いて

水野 清一氏

一、佛印所見

梅原 教授

水野講師は寫眞を示し乍ら有名な雲岡石窟に於いて、釋迦の一代理乃至因緣譚を表はした所謂因緣圖像の多いことを二三の實例についてかたり、曇曜の開鑿せる石窟に於いて同じ曇曜の譯出した付法藏傳・雜法藏經に載せられた因緣譚に吻合する圖像のあることは因緣淺からぬことから之等因緣圖像を通じて北魏の佛教を眺める時、かの唐宋以降に於いて釋迦を超越者・佛陀なる抽象的觀念にて取扱つてゐるに對し當時にあつては釋迦をば因緣佛、換

言すれば具體的に歴史的に存在した佛として信仰してゐたことが考へられるのではあるまいかと説いた。

梅原教授は先に交換教授として佛印に赴いた間の經過を述べ、次に彼地の考古學研究に關する若干の所見の開陳があつた。

佛印の石器時代の研究はその地質調査に附隨してマンズイ氏により始められ、バット、フロマージュ、コラニイ女史等に依つて繼續、我が國にも松本信廣氏や大山柏公爵などにより多少紹介せられてゐるが、然し彼地に於いて多くの遺物を實見する時、尙その外に各種のものがあり、例へば所謂玦狀耳飾の如き我が國石器時代との比較考察上注意すべきものがあり、織維土器、彌生式の土製支脚、厚手の甕棺の存在等の外、子安貝の夥しい使用等々今後の調査研究に待つべきものが多い。唯佛印に於いてはあの密林や湿地でその石器時代遺跡の發見調査には非常な困難が考へられる。吾々は今や彼の國人の業績の紹介から一步前進して我々の眼で自主的に之等を検討して行かねばならぬ。

次に佛印北部の漢代並にそれに續く遺跡は實に夥しいものである。之等の遺跡は東の朝鮮平壤附近の樂浪郡時代の遺跡や北の外蒙古ノインウラのそれに相對應すべき性質のものであつて、同じ漢文明の影響のもとにあり乍ら夫々にその土地の歴史的地盤によりその中に特殊なものが見られ興味深い。墳墓は木柵磚柵兩者があり、後者は所謂蒲鉾形のものである。之等遺跡は五銖錢を出土することからヤンシー氏等も漢代のものとしてゐる様であるが、伴出遺物の示す所明かに六朝に下るものがあり、又同じく漢・六

朝の文化を受け乍ら我が國と異り鏡に仿製鏡と言ふべきもの殆どなく、この點この地の當代人の鏡に對する考へ方が推察されて面白い。尙明器には支那本土のものと同じ、この地で造られその風俗を表はす點で興味あるものがある。云々。(及川幸夫記)

會報

◇會員 動靜

◇入 會

- 京都市右京區花園寺ノ内四六 岡部慶三方 木阪 登氏
- 京都市左京區吉田泉殿町六四 高山館 内木 晋氏
- 京都市左京區北白川葛町八 安達伊太郎方 近藤 範二氏
- 京都市下京區西高瀬川筋七條北 藤谷 俊雄氏
- 京都市小石川區久堅町七六 右四氏 外山軍治氏紹介 木村 正雄氏
- 山形市山形師範學校男子部 右 肥後和男氏紹介 工藤 定雄氏
- 東京市澁谷區代々木初臺西町五〇六 右 霧淵一氏紹介 河野 國雄氏
- 東京市膳所錦町四〇六 右 内藤晃氏紹介 西田 弘氏
- 大津市膳所錦町四〇六 右 藤岡謙二郎氏紹介

◆轉 居

滿洲國營口市營口中學校

森田 鐵次氏

◇寄贈交換圖書

- 「氏神の信仰」(太田亮)神祇叢書
- 國學院雜誌 四九の二、三、四
- 國語・國文 一三の三、四、五
- 國民精神文化 九の二
- 考古學雜誌 三三の三
- 斯道文庫報 一三
- 史 淵 二八
- 史 學 二一の二
- 史學雜誌 五四の二、三、四、五
- 史迹と美術 一四の二、三、四
- 史 潮 一二の二
- 社會學徒 一七の二、四
- 社會經濟史學 一二の二、一、二、一三の二
- 「神道と國民生活」(河野省三)
- 人類學雜誌 五八の三、四、五
- 帝國學士院記事 二の一
- 哲學研究 二八の四、五
- 東方學報 東京一三〇三
- 東洋史研究 八の一
- 明世堂書店
- 國學院大學雜誌部
- 京都帝大國文學會
- 國民精神文化研究所
- 日本考古學會
- 斯道文庫
- 九州史學會
- 三田史學會
- 史 學 會
- 史迹・美術同友會
- 大塚史學會
- 社會學徒社
- 社會經濟史學會
- 神祇叢書明世堂書店
- 日本人類學會
- 帝國學士院
- 京都哲學會
- 東方文化學院
- 東洋史研究會

熱河考古資料編 滿洲古蹟古物名勝天然記念物保存協會

文部省 教學局

日本諸學 一七(歷史學)

東北帝大文學會

研究報告 一〇の二、三、四

南亞細亞研究所

南亞細亞學報 一

善隣協會調查部

蒙 古 一〇の三、五

鶉 故 鄉 會

夢殿と救世觀音 一二(國語漢文協)

立命館出版部

立命館大學論叢 一三の二、三、四

歷史學 研究會

歷史學 研究 一三の二、三、四

日本歷史地理學會

歷史地理 八一の二、三

論 文

前號掲載時野谷博士著作目錄追加

昭和十、十一

前號誤植訂正

外國史教育の一見解 歷史教育

頁 段 行

誤

八一下一二

後者の

八一下一三

前者の

九一上一六

黃工地帶

後者の

九一上一六

黃土地帶

後者の